

---

# Message In Dream

櫻姫

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

M e s s a g e   I n   D r e a m

### 【Nコード】

N 4 1 1 3 C

### 【作者名】

櫻姫

### 【あらすじ】

あなたは夢を見たことありますか？その夢はあなたになにか伝えていましたか？例えば、運命の人の暗示とか・・・それはそんな夢の話。

『待つて、待つてつて!!  
お姉さん、もう、限界。  
少し、休もう?  
ねっ、お願い。』

いったい、ここはどこ?  
どのくらい、走ったのだろう?

景色は何も変わらない。  
いや、何も見えない。  
暗くてではない。

光が眩し過ぎて、辛うじて見えるのは、私をどこかに連れていこう  
としている少女だけ……

今まで、白いワンピースを着て、長い黒髪をなびかせて、私の前を  
走っていた少女が、私の声を聞いた途端、ピタリと立ち止まった。  
しばらくの間、その少女は全く動かなかった。  
周りは静寂に包まれていた。  
冷たく、全てを無にしそうな空気だった。

私は耐え切れなくなり、少女に話しかけようとしたその時、少女が  
私の方を振り向いた。  
眩しすぎる光のせいで、少女の姿がぼんやりしか見えない……  
何か話しているみたいだけど、声が聞こえない。

『聞こえないから、もう一回、始めから言って?』少女は私を無視して、何かをまだ、話し続けてる。

やっぱり聞こえない・・・

この子は私にいったい、何を伝えたいの?

だから、分らないの!

聞こえないの!!

少女はようやく話し終わったみたいで、周りがまた、静寂に包まれた。

その数秒後、冷たい空気が、急にふぁっと優しい、暖かい空気に変わった。

私は驚いて少女の方を見ると、少女は微笑んでいるようだった。

とても優しく、暖かく、全てを受け入れてくれるかのような笑顔で、微笑んでいるような気がした。

そう、まさに今、私を取り巻く空気と同じように・・・

そして、私の目から、自然に涙が零れていた。

どのくらい、こうしていただろう・・・

涙がようやく止まった。

少女がいた所を見たら、もう少女がいなかった。

しかし、その場所には違う誰か、男の人らしき人がいた。

『誰・・・?女の子、見ませんでしたか?』

私がそう聞いた時、周りの空気がまた、変化した。

さっきまでの暖かさ、優しさと更に、今までにないくらいの懐かしさ、愛おしさを感じた。

私の目からは、ダムが決壊したかのように、涙が溢れ出て来ていた。

あなたは誰・・・？  
誰なの・・・？

ジリリリリ・・・  
パチ・・・

またか・・・

この頃、この夢を頻繁に見る。

小さい頃から、この夢を見ていた。

だけど、一年に一回くらいのペース。

でもここ最近、一ヶ月前くらいから、毎日のように見る・・・

いつも同じ所で終わる。

小さい頃から誰か知りたいのに、分からないまま・・・

何かがひっかかる・・・

「深雪、起きてるの？遅刻するわよ！」

私は階段の下から呼ぶママの声で、ハッと我に返った。

時計を見ると、あと10分で家を出なければ、完璧に遅刻である。

私は慌てて用意をして、家を出た。

家を出て走っていて、家の近くの公園に差し掛かった時、私は急いでいたはずなのに、足を止めてしまった。

いつもは普通に通り過ぎるのに、今日は出来なかった・・・

だって、その公園のブランコに．．．  
あの夢の少女がいると思ったから．．．

ブランコに乗っている少女は、夢の少女とは姿は全く違う。

その子は髪は黒髪のシヨートで、花柄のワンピースを着ていた。  
全く姿は違うけど、絶対に夢の少女だ。

だって、雰囲気と同じだから．．．

何回も夢で会ってるから、間違えるはずがない。

その子は、いつの間にか、固まっている私の前にいた。

「ど、どうかしたの？」

その子は答える代わりに、微笑み、そして私の前から走り去り始めた。

私は自然にその子を追いかけ始めていた。

どのくらい、走ったのだろう．．．

無我夢中にその子を追いかけていて、気付いたら、見たこともない  
草原が広がっていた。

やばい．．．

疲れて来た．．．

その子はどんどんと遠ざかっていく．．．

追いつけない．．．

もう、叫んでも聞こえない距離にいる．．．

も、もう、ダメ．．．

私はとうとう限界に達し、座り込んでしまった。

私の視界には、あの子はもういない．．。

周りを見ると、草原がただ広がっていて、数百メートル先に大きな木が一本あった。

私、家に帰れないよ。

携帯は圏外だし．．

ここ、どこなんだろう．．

どうしよう．．．

人がいる気配もない。

私、この草原にただ一人、取り残されちゃった．．．

私はあの子を追い掛けたことに後悔をし始めていた。

とりあえず私は、最後の気力を振り絞り、大きな木を目指して歩き始めた。

目立つ場所にいれば、誰かが発見してくれるかもしれない．．．

私は、大きな木に最後の望みをかけた。

だんだんと近づいて行き、残り200メートルくらいで、その木の下に人影が見えた。

幹に寄り掛かり、絵を描いているみたいだった。

その人は、私に気付いていない。

私は人がいることに嬉しくなり、足を速めた。

何か強力な物に引き寄せられているように、自分の足は今すぐにでも走り出しそうなくらいの速さで、その人の方へと向かっていた。

そして、その人に近づいていくほど、胸騒ぎがどんどん大きくなっていた。

その人まで残り50メートルの時点で、私は立ち止まった。

その人が私に気付き、微笑んだからだ。

その人が微笑んだ瞬間、私のからだに電撃が走った。

そして、私の目からは自然に涙が出ていた。

間違いない、絶対に．．．  
この人だ、この人が．．．  
愛しい、ものすごく愛しい．．

私は涙を止めることも、歩くことも出来ずに、ただ立ち止まり泣いていた。

すると、その人は立ち上がり、私の方に歩いて来た。

その人が近づいてくれば来るほど、私の胸は高なり、涙が溢れ出た。その人は、私の前で止まった。

「キミだよな？いつも夢で会っのは．．。違う？」

私はその人の質問に、頷いて答えるのが精一杯だった。

この人が．．．

こんなにも、こんなにも愛おしいと思ったのは初めて．．．

「会いたかった。あの女の子が、キミみたいな人でよかった．．．」

その人は、泣いている私を力強く抱きしめた。

「これから．．．」



ジリリリリリリリ．．．．  
パチ．．．

夢か．．．．

久しぶりに見たかも。

いいところで目覚ましになるから．．．

あの人は、何て言いたかったんだろう．．．？

それにしても．．．

あの人、すごくそっくりだったな。

私は、隣で寝ている愛しい人の顔を見た。

きっとあの夢は、この人が運命の人で間違いないってことを教えてくれたにちがいない。

そしてきつと、あの夢に出て来る少女は．．．。

私はお腹を触った。

今、私たちの一番大切な、なによりも大切な命がいるお腹を．．．。

さあ、起きて、お弁当を作らなきゃ。

起きてきたら、この夢の話をしてあげよう。

そして、この子が産まれて大きくなったら、この夢の話をしてあげよう。

雲がない快晴の青空に、私は誓った。

（後書き）

思いつきで書いたので、つたない文章で、起承転結がきちんとなり  
たっていないかもしれませんが、少しでも楽しんでいただければ幸い  
です。最後まで読んでいただき、本当にありがとうございます。感  
謝致します。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4113c/>

---

Message In Dream

2010年10月12日07時15分発行